



本物の“児童中心の教育”を世界の現場へと届ける

長きにわたって続いた圧政と内戦の影響で、教育が大きく立ち遅れてしまったカンボジア。世界中から数多くの援助が入ってきてはいるものの、末端の教育現場にはさまざまな問題があり、教育の質の向上にはまだまだ時間がかかると言われています。そんなカンボジアで、日本の教育委員会にあたる州の教育局の手助けを行ってきた伊藤さん。現地の様子や実際に手掛けた活動について伺いました。

応募のきっかけ

学生時代、ネパール山麓をトレッキング中にA型肝炎で倒れ、ネパール人に助けられました。その経験から、いずれ途上国の人のために働きたいと思っていました。しかし、就職や結婚、子育て、介護などを経るうち、シニアの歳に。それでもJICAボランティアには、シニア世代の女性にも活躍できるフィールドが用意されていることを知り、娘の就職をきっかけに応募を決意しました。中学校での教師経験を生かせる活動を探していたところ、グローバルフェスタのJICA相談テントで「教育行政」という職種を知り、挑戦してみることにしました。

派遣前訓練

カンボジアで話されるクメール語を体系的に学ぶことができたことは、本当に有り難かったですね。現地の先生の前で教科書を読むほどに上達したので、仕事の面でも役立ちました。

派遣中

カンボジアのシェムリアップ州内にある小学校を訪問し、月1回開くことになっている教員研修会を必ず実施するよう指導して回りました。カンボジアには世界各国からさまざまな支援が入っていますが、現場の先生たちのレベルアップが図られておらず、教育内容の充実が必要とされていました。現場の先生たちの考え方は、字問といえば理論を覚えることであり実学は後回し、というもの。たとえば、計算であれば、引き算や足し算がどんなものであるかという理論は教えるものの、計算練習の問題数はとても少ないのです。つまり、生徒たちは教科書に載っている理論は丸暗記していますが、それを応用する力は備わっていませんでした。同じように、「児童中心の教育」や「教材を使った授業」の大切さについても、現場は一応認識しているものの、それを実際の授業で行うための正しいノウハウがありませんでした。

そこで、私が実践したことの一つは、日本の小学校で使われている“計算ブロック”を使った授業のやり方を伝えること。正しいブロックの教え方や計算方法をわかりやすく教えれば、子どもたちの学習内容が改善されるということを先生たちに伝えました。

帰国後（現在）

帰国後の現在も、現地で行ってきた「教材を使う授業」の実施方法伝達の活動を続けています。具体的には、計算ブロック（日本の小学校の算数の授業で使われているもの）を現地の同僚に送り、一緒に使用法を考えながら、暗記物ではない算数の普及に取り組んでいます。



▲ 通学についての現地調査



▲ 研究会での健盤ハーモニカ紹介



伊藤さんへの3つの質問

Q1. 行くまでに不安だったことは？

退職してすぐの派遣でしたので、出発までの毎日は非常に忙しく、事前に何かを心配する暇はなかったというのが正直なところですね。

Q3. 家族の反応は？

家族は快く送り出してくれました。実は今、娘もJICAの青年海外協力隊に参加し、アフリカに行っています。また、任期中に現地によく来てくれた夫も、現地にロッククライミングの練習場を作ってクライミングのNPOを始めました。私の影響が家族に多少なりともあったかもしれませんね。

Q2. 大変だったこと、苦労したことは？

まるで“大名と家来”の関係のような現地の職員に存在する上下関係には悩まされました。上司の都合が変われば、一般の職員はたとえ先約があっても、上司に従うことが求められます。せっかく立てた予定がふいになってしまうことに、もどかしさを感じました。

そこで私は、上司と一般職員の間に入り、それぞれの意見の橋渡し役となって活動をしました。誰とも分け隔てなく接する私の姿から何かを感じてもらえればと思いました。



JICAボランティアで得たもの

自分にも何かできることがあるということに気付けたことでしょうか。さらにカンボジアの場合は、JICAのボランティアに限らず、多くの国際NGOの方々が継続的に参加されています。中には内戦時代のタイ難民キャンプ支援から継続されている方も。そのような経験豊富な先輩方との出会いも私にとって大きな宝となっています。

これからJICAボランティアを目指すみなさんへのメッセージ

JICAボランティアに参加したからこそ得られた、海外で活躍する素晴らしい先輩たちとの出会い。私自身、それらの出会いがあったからこそ、今の人生を歩めているように思います。世界には、シニアのみなさんのこれまでの経験を生かせる環境や素敵な出会いがあります。まずご自身の健康を第一に、大きい病気やケガをせずに働けるよう自分の力をしっかり蓄えてから、参加していただきたいと思います。